

令和 4 年 6 月 8 日現在

機関番号：13301

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2021

課題番号：18K12723

研究課題名(和文) サッチャー政権期イギリスの外交・欧州安全保障政策と新冷戦 1979-1984年

研究課題名(英文) British foreign and security policy under the Thatcher government, 1979-1984

研究代表者

岡本 宜高 (Okamoto, Yoshitaka)

金沢大学・法学系・講師

研究者番号：10747827

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、1979年のサッチャー政権発足から新冷戦下の東西対立が頂点に達した1984年までを主な対象時期として、第1にサッチャー政権の外交構想と欧州安全保障政策、第2に新冷戦に対する西側同盟の政策形成にイギリスが果たした役割を明らかにすることを目指した。その研究成果については、学術雑誌『国際政治』への投稿論文、及び英語での単著として公開する準備を進めていたが、健康上の問題により研究を中断せざるを得ず、残念ながら研究期間内に完成させることができなかった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義は、第1にその独自性が注目されがちなサッチャー政権期の外交・安全保障政策について、「サッチャー以前」の政策を踏まえた実証的分析を行い、その特徴を明らかにしたこと、第2にサッチャー政権期のイギリス外交について当時の緊張の度を高めていた東西冷戦下の西側同盟内政治力学の中に位置づけ、その多極性と重層性を明らかにする視座を提供したことである。

研究成果の概要(英文)：This research project focused on the period from 1979, the year when Margaret Thatcher became Prime Minister of the UK, to 1984, when tensions in East-West relations reached a crescendo. The project aimed to answer two questions: first, what objectives did the Thatcher government envisage for the UK's foreign and security policies, and secondly, what kind of role did the UK play in the policymaking process of the Atlantic Alliance when dealing with renewed Cold War tensions? The research findings were to be published as articles in peer-reviewed journals and as an English monograph. However, due to health issues, there have been delays in their planned publication.

研究分野：外交史

キーワード：外交史

## 1. 研究開始当初の背景

1979年に発足したサッチャー政権下のイギリス外交は、サッチャーのリーダーシップのもとでの対米協調路線が特徴であったとされる。欧州での冷戦は1980年代初頭になると東西関係の悪化にともなって、「新冷戦」と呼ばれる深刻な対立状況に陥ったが、この冷戦の変容に対しても、サッチャーは1981年に米大統領に就任したレーガンと協調し、両国間の「特別な関係」が新冷戦への西側同盟の対応を牽引したと主張される。

近年の史料公開に伴い、イギリス外交史の分野ではサッチャー政権期の対外政策について実証研究が進んでいるものの、研究の関心はサッチャーの指導力や外交観や、レーガンとサッチャー間の「特別な関係」の形成過程に置かれている。だが、この時期のイギリス外交を西側同盟内政治の枠組から捉える研究は十分には進んでおらず、イギリスが西側同盟内でアメリカに次ぐ戦力を有し、新冷戦に対する西側同盟の政策形成に主導的役割を果たしたとされることを鑑みると、これは研究上の大きな欠落であると言わざるを得ない。また、冷戦史・欧州国際関係史研究では、1970年代を通じたアメリカのパワーの衰退が欧州同盟国の相対的自立を生み、西側同盟内関係を多極化・重層化させたことが指摘されている。しかし、西側同盟内でのイギリスのプレゼンスにも関わらず、仏独などに比べるとイギリスへの関心は限定的なものにとどまっている。

## 2. 研究の目的

本研究では、1980年代初頭の西側同盟の多極性と重層性を明らかにすることを目指し、1979年のサッチャー政権発足から新冷戦下の東西対立が頂点に達した1984年までの期間について、以下の2点について実証的に解明することを目的とする。

(1) サッチャー政権の外交構想と欧州安全保障政策：サッチャー政権がどのような外交構想とそれに基づく欧州安全保障政策を構想したのかを分析する。

(2) 新冷戦に対する西側同盟の政策形成にイギリスが果たした役割：西側同盟内関係の多極化がアメリカを頂点とした同盟内のパワーバランスを変容させたことを踏まえ、アメリカとの「特別な関係」と欧州同盟国の一員としての立場の狭間にあったイギリスが、西側同盟が新冷戦に対処する政策を決定する過程でいかなる役割を果たしたかを分析する。

## 3. 研究の方法

本研究は、公文書などの一次史料を中心に使用して行う実証研究であり、以下の3点から分析を行う。

### (1) サッチャー政権の外交構想と政策決定過程

本研究の全体にかかわる基盤として、サッチャー政権期の欧州安全保障政策の決定過程を分析し、サッチャー政権が新冷戦や欧州国際関係をどのように認識し、イギリスの役割をどう想定したのかを把握する。その際、キャラハン前政権の政策はどの程度継承され、その後の新冷戦の経過とともにどう変容したか、英米関係がいかにイギリスの欧州安全保障政策決定過程に影響を及ぼしたのかを実証的に解明し、サッチャー政権の外交政策の特殊性を再検討する。

### (2) 「ユーロミサイル危機」とイギリス

近年の研究では、「ユーロミサイル危機」は欧州での新冷戦の核心であるだけでなく、1987年のINF全廃条約の締結という冷戦終結への転機をもたらした問題とみなされているが、その関心の中心はアメリカとINF配備が想定されていた西ドイツにあり、この危機に対するイギリスの関与や役割はいまだ十分には明らかになっていない。一方、この危機は欧州安全保障に関わる問題であったが、INFの削減・撤去に関する交渉主体は米ソ両国であり、仮に米ソ交渉が欧州同盟国の意向を踏まえずに進展すれば米欧間に緊張が生じる可能性を常に抱えていた。本研究では、アメリカと欧州同盟国の思惑が1つの政策へと収斂する過程でのイギリスの関与と西側同盟内の意思決定過程を解明する。

### (3) 欧州安全保障と欧州統合の連関

欧州統合の進展は、冷戦下の欧州同盟国の政治的、経済的結束を高める重要な要素であると同時に、それがもたらす欧州の自立は西側同盟内で米欧間のパワーバランスを変化させる要因ともなり、西側同盟内の多極化・重層化を促進する要因となった。サッチャー政権期のイギリスと欧州統合の関わりについては注目が集まるものの、それが欧州安全保障政策といかに関係したのかについては十分には明らかになっていない。本研究では、発展的考察として、新冷戦下のイギリス外交と米欧関係が欧州統合に係る問題からどのような影響を受けたのかを考察することを通じ、西側同盟内の政策決定過程の重層性を理解することを試みる。

## 4. 研究成果

本研究では、1979年のサッチャー政権発足から新冷戦下の東西対立が頂点に達した1984

年までを対象時期として、第 1 にサッチャー政権の外交構想と欧州安全保障政策、第 2 に新冷戦に対する西側同盟の政策形成にイギリスが果たした役割を明らかにすることを目指した。その研究成果については、学術雑誌『国際政治』への投稿論文、及び英語での単著として公開する準備を進めていたが、健康上の問題により研究を中断せざるを得ず、残念ながら研究期間内に完成させることができなかった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------